長特研だより

第１２０号

発　行：長崎県特別支援教育研究会
事務局：長崎県立希望が丘高等特別支援学校
編集校：長崎県立虹の原特別支援学校壱岐分校
発行日：令和４年１１月１８日

第３３回　長崎県特別支援教育研究会　総会及び研究大会　報告

本年度の総会及び研究大会は、８月４日（木）に３年ぶりの集合型での実施に向けて準備を進めてまいりましたが、新型コロナウイルス感染症の感染状況が再拡大していたことから、書面及び Web 上での開催となりました。本号では簡単ではありますが、総会、講演、各分科会の発表・指導助言の内容を報告いたします。

総会報告：書面での開催となりました。

＜議題＞（１）令和３年度事業報告
（２）令和３年度会計報告・監査報告
（３）会則について
（４）令和４年度役員紹介
（５）令和４年度事業計画(案)
（６）令和４年度予算(案)

web アンケートにて回答をいただき、回答者全員が「承認する」であったこと、それ以外に質問等が無かったことを第 3 回役員会にて確認、議題についてすべて「承認する」されたことを報告いたします。

全体講演

演　　題　**「知的・発達障害児の自己理解と支援」**

講　　師　筑波大学人間系　准教授　小島　道生　先生

1　知的・発達障害児の自己理解について

（１）「自己のモデル」や自己理解の発達について

（２）各発達障害等における自己理解の傾向

（ＡＳＤ、ＡＤＨＤ、ダウン症等）

2　発達障害者に対する自己理解の支援

（１）ＳＴＥＰ１：身体的な感覚から自己/他者理解を高める

①直接的に触れる

②道具を使って「協力」

（２）ＳＴＥＰ２：自分に向き合うための支援

①「自分と向き合う」機会の導入

②「他者との関係」へのアプローチ

（３）ＳＴＥＰ３：多面的な自己理解と時間軸の拡大

①自分のいろいろな側面について知る

（ア）自分を見つめる
（イ）他者との交流を通して
「自分らしさ」への気付き

②時間的拡大自己にかかわる支援

（ア）過去の自分に比べて、成長を実感できる機会の確保

（４）ＳＴＥＰ４：「他者から見た自分」について理解を深める

①相手の立場に立つ経験　※客観的な理解は９歳頃から可能

（５）ＳＴＥＰ５：メタ認知と視点を変える、楽観性

①自分を見つめつつも、過度な自己批判にならないようにする

②メタ認知を活用する　例）自分を「実況中継」する、「なぜ」「どうして」と自分に問いかける　など

③視点を変える　例）イラショナルビリーフ（私は～でありたい、などの信念を捨てる　など）

（６）ＳＴＥＰ６：自分らしく生きることの支援

①基盤となる力

・自己の多面的な理解　・時間的拡大自己　・他者との関係

②性格的な強みの理解を深め、活用へ

３　まとめ

（１）自己理解を育む支援に必要なこと

⇒①自己理解：他者との交流の中で育まれる肯定的な側面から

②自己理解を深める：多面的な自己理解、他者から見た自分、時間的拡大（希望と自己成長感）

③メタ認知・視点を変える：精神的な健康

④性格的な強みとセルフアドボカシーへ：自尊感情低下予防

各分科会の発表の概要、質問への解答

第１分科会 【小学校】（小学校における特別支援教育）

「自立活動の研究～バランスのとれた認知の形成を目指して～」

発表者：諫早市立有喜小学校　教諭　佐倉　嗣宜

助言者：筑波大学　人間系　　准教授　小島　道生

１　実態と研究の方向性

表れ方に個人差はあるものの、自閉症、それに類する者、選択制緘黙がある者など、集団生活に適応できず困る児童が多い。その要因として学校生活で起こる現象の受け止め方の違い（認知の歪み）があげられる。人の行動プロセスを「現象→認知→感情→行動」と仮定し、認知と感情に問題があるとして治療を進める認知療法の考え方で研究を進めた。

2　令和２年度の研究：「感情」を見つめる自立活動

（１）単元名「用具を使って遊ぼう」

（２）教材の価値

身近な友達とルールのあるゲームで、ダイナミックに体を動かし活動する。苦手な集団行動や一人チャレンジやゲームなど、楽しみながら行うので、覚醒レベルも上がり、感情を表出しやすい。また、体験型学習であるので、自分の感情や行動に気付き、バランスのよい認知を身に付ける効果がある。

（３）指導の実際

①ゲーム：不適応行動の誘発を行い、様々な気持ちの言葉を表出させる。

②感情の可視化：ペットボトルに絵の具を入れて色を付け、感情の揺れを表す。

（４）まとめ

①自分の感情に気付くことができた。

②自分の感情の揺れが行動に影響していることを理解できた。

③感情を見つめることの良さに気付き、日常生活に生かすことができた。

3　令和３年度の研究：バランスのとれた認知の形成を目指した自立活動

（１）単元名「先人に学ぶ」

（２）教材の価値

認知の形成を人格の涵養と捉え、人格の涵養のきっかけとなるような日本の神話（古事記等）や古今東西の偉人（聖徳太子、二宮尊徳、本居宣長等）の物語から、憧れや美しい行いを育む。授業形式は道徳科の授業の流れを用いた。

（３）指導の実際

①偉人の絵本、紙芝居、短冊カード：道徳的価値の方向付けと把握、題材に対しての価値の焦点化

②オリジナル偉人カルタ作り：自己の考え方の落とし込み

③教師の説話：教師自身が偉人の言葉を生かしていく姿勢や感動の気持ちを示す。

（４）まとめ

①偉人の美しい行為を理解し、憧れをもった。

②美しい行為に憧れをもち、学校生活の行動に表すことができた。

4　まとめ

（１）脳機能障害であるにしろ、環境による行動障害にしろ、認知にアプローチしていくと効果的である。

（２）認知概念は行動を決めるもので連続性があるので、日本建国から２０００年以上の歴史から、先人の教えから得るものはとてつもなく大きい。先人の教えは今求められているものである。

・不適切な行動をとったときに、事前のめあてを通して見つめ直すとよいのではないか。

・感情の変化を可視化して振り返り、次はどうコントロールしようかといったやりとりが次の感情のコントロールへの意欲を育むことにもつなげることができていた。

・落ち着いているときに「対策」を一緒に考え、「できそう」「やってみたい」と思えることを提案できると良い。

・「なりたい自分」「憧れの人」が歩んでいる部分で、自分に何が近付けるかなというところを具体的な行動（美しい行為）で提案して、「それなら僕にもできそう」というところに落としていくことができていた。

・感情の変化の捉えを絵の具で視覚化して提示していたこと、行動レベルで、いろいろな人の素晴らしい生き方に触れながら子供たち自身が行動の変化を起こせるようなきっかけを作ることができた実践だった。

小島先生

質問	①	発表者からの回答
自分もそうだったが、特別支援学級担任を経験していないと、「自立活動」についてきちんと理解できていなかった。「自立活動」とはどんな活動なのか、またはその実践を校内において共通理解（情報共有）できる時間はあるか。	➡	・本校の校内研究は算数で行っているが、特別支援学級は、生活単元学習や自立活動を研究し全校授業を行っている。自立活動や、生活単元学習は、教育課程を担任が弾力的に作成することができる。全校授業をすることによって、理解を深めていただくように心掛けている。

第２分科会 【中学校】（中学校における特別支援教育）

「『生徒が自分のペースで取り組み、自信をもてる』授業のための支援

～安心、楽しみ、学びのある環境の中で～」

発表者：諫早市立永田中学校　教諭　渡辺　隆

助言者：長崎県教育センター特別支援教育研究班　指導主事　福田和代

１　はじめに

本校は１年生３５名、２年生３１名、３年生４１名で、全校生徒１０７名の小規模校である。特別支援学級は、知的障害学級１クラス（１年生１名）、自閉症・情緒障害学級１クラス（３年生１名）である。特別支援学級の生徒と通常の学級の生徒と関係は良好で、お互いを受け入れ、声を掛けたり、助け合ったりしている。また、週に１回スクールカウンセラーと心の教室相談員も来校して、支援や相談業務を行っている。

本発表は、知的障害学級（通称なのはな学級）の生徒について、今年度４月入学してからの取組を実践報告としてまとめたものである。

２　本校の特別支援教育

（１）特別支援教育の目標

①全職員による関わり

②特別支援教育の一般化・日常化　　「どこの学校にもいるという認識の中で」

（２）校内教育支援委員会

①頻度…３週間に１回（スクールカウンセラー来校日に設定）

②組織…校長、教頭、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー、各学年の特別支援教育担当者、養護教諭

③内容…特別支援学級の生徒、通常の学級で特別の支援を必要とする生徒について報告、情報共有、助言

④情報共有…教育支援委員会に参加しない教員には、報告シートと会議録を回覧

３．１年　該当生徒の様子

（１）生活面

①学級目標

・生徒自身が目標を書いた。

・スモールステップで、いろいろな角度から取り組めるように目標を設定した。

②交流学級の生徒との関わり
③専門委員会
④部活動
（２）学習面
①交流学級、知的障害学級で受ける授業
②理科や自立活動における様子
・祖父が農業を行っているため、祖父の手伝いをすることがあり、作業内容が分かっている。
・育てた人参、ブロッコリー、大根を職員に売り、貯めたお金を郵便局の通帳に入れて、次年度の種の代金にする。

4　学習支援の方針

（１）ちょっとしたことでも、すぐ褒める。次の活動への原動力になるため、本人の考えを受け止め、その後アドバイスするようにした。
（２）教室の後ろにあるロッカーにメジャー、本、日本地図、直定規を置き、すぐ使えるようにしている。
（３）「できるだけ」「可能な範囲で」は通じない。抽象的な言葉は避ける。分かりやすく伝える。

5　学習支援の実際

（１）授業の工夫
①繰り返しや復習ができるように、すぐ黒板を消さないようにする。
②時間の感覚が分かったり、見通しをもてたりするような教材を使っている。
③教室に東西南北を書くことで自身の生活に結び付けるようにしている。
④本生徒はメジャーが好きで、自分が作ったレゴの高さを測る活動を行った。
⑤８０グラム、１．５グラムなどと指示をして、細かい数字まで合わせることができた。
（２）学習環境の工夫

6　おわりに

過度にできるようになることを期待せず、長い目で「待つこと」を大切にしたい。

・全職員による関わりとして情報共有や適切な指導、学びやすい環境への設定をすることが重要。次の活動に取り組みたくなるサイクルを生み出す、自発的・自主的な活動を引き出して主体的な学習を促すことが必要である。また、生活に結び付いた具体的な学習活動を実際的な学習の状況の中で指導することが大切である。
・子供たちにとって教室は学びの場であり、子供たちが学習に集中できるよう環境を整えることが大切である。学びのスペースでは、授業で使う教材がまとめられていて、授業の内容や自分の理解をすすめるために必要な教材が整理して配置されていることで、子供自身が必要な物をそろえたり、そこにある教材を基に考えたりすることにつながる。
・子供たちが学ぶ内容の基本は学習指導要領であり、学習指導要領の内容は、発達に即して系統的に考えられている。子供たちが、今どの段階にあるのかを明確にし、その上でスモールステップで指導内容を考えることが必要である。先生が感じられた子供の変化を言語化して伝えることで、生徒本人が成長を感じられるようにしてほしい。

福田先生

質問	①	発表者からの回答
「各教科等を合わせた指導（生活単元学習）（日常生活の指導）（作業学習）」は取り入れられているのか。取り入れられているのであれば、どのような実践や工夫をされているか教えてほしい。		取り入れている実施内容と工夫は下記のとおりである。 ・いろいろな材料を使って、もの作りをする。 ・ソーシャルスキル・トレーニングに教材を使って取り組む。 ・身の回りの整理整頓を心がけ、生活するうえで整然とした教室環境をつくる。 ・教室の植物や学級の畑の野菜に肥料や水をやる。 ・配慮としては、できたら褒めて自己肯定感を育てたり、失敗してもすぐに手を出さず、頑張らせたりしている。
質問	②	発表者からの回答
マンツーマン指導で、個人のペースに合わせた細やかな指導ができていると感じたが、今後の生活を踏まえ考えると集団の中での適応力や生活力も必要になってくると思う。集団生活における課題や支援などがあれば教えていただいたい。		・特別支援学級で受ける授業（マンツーマン）と交流学級で受ける授業は同じくらいの授業時数。集団での学びは交流学級で、また、部活動、委員会活動でも深まると思う。

第３分科会 【特別支援学校】（教科別の指導）

「生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指した国語・数学での取組」

発表者：長崎大学教育学部附属特別支援学校 教諭 内藤 理子
助言者：川棚特別支援学校 校長 松田 竜司

1 はじめに

第２４次研究では、第２３次研究の継続研究として、研究テーマを「生きる喜び・生きる力を育む教育課程の編成その２」、副題を「新学習指導要領を踏まえた授業改善と評価」と設定し、カリキュラム・マネジメントの確立を目指すこととした。本発表では、研究２年目に当たる令和３年度に高等部で取り組んだ、生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指した国語・数学の授業改善の実践について報告する。

2 本研究での取組について

（１）比較を取り入れた学習指導について

（２）学びをつなげる工夫について

① 単元計画の掲示

② 話型「比べる話し方」の掲示

③ ワークシートの工夫

④ 発問の工夫

3　新単元計画について

単元構想の際には、本校で令和３年度から活用を始めた「新単元計画」を活用した。新単元計画は、「指導内容」、「単元構想図」、「単元計画」で構成されており、従来の単元計画にあった単元の目標や計画に加え、 中央の単元構想図の部分に、 主体的・対話的で深い学びの実現に向けての工夫を記入する書式になっている。

4　本校高等部の国語・数学の授業について

高等部では、実態別の五つのグループで国語・数学の学習を行っており、全職員が国語・数学どちらかの授業を担当している。各学習グループでは、学習指導要領の該当段階の内容を高等部３年間で学習できるように計画しており、一つの段階の内容を複数年に分けて配列しているグループもある。

5　具体的な実践について

具体的な実践例として、高等部１段階を学習する数学 A グループ「平面図形①四角形の特徴を調べよう」の単元での実践から、「思考・判断・表現の力の育成」について考察する。本単元では、学習指導要領高等部１段階「 B 図形の平面図形 」に関する学習を行った。本グループは高等部２・３年生の４名で構成されており、図形に関しては、直線の平行や垂直の関係の理解や図形の大きさを的確に表現して比較したり、既習事項を図形の考察に生かしたりすることなどは理解できておらず、以前の単元の様子からも、単元内で学習したことを覚えておくことが難しく、そのことから学習内容がつながらず、既習事項を他の場面で活用することが難しいという実態があった。授業改善に当たっては、高等部で取り組むこととした「比較を取り入れた学習指導」と「学びをつなげる工夫」をグループの生徒の実態に合わせて工夫していった。

※実践の詳細については割愛します。（資料をご参照ください。）

6　成果と考察

比較を取り入れた学習指導を行うことで、生徒が思考する姿や学習のポイントに気付く姿が見られ、さらに学びをつなげる工夫により、学習したことをつなげて考えたり、以前の自分と比べて学習したことを価値付けたりする姿も見られていた。友達の姿や前時の学習と比較しながら思考する姿は、学習したことをつなげながら筋道を立てて考える力、比べて考える力を働かせている姿であると考えられ、バラバラだった知識をつなげる姿は深い学びの姿だと捉えることができる。このような生徒の姿から、本研究での取組は主体的・対話的で深い学びの実現に近付く実践だったと考える。

・授業改善のために、知的障害や発達障害のある児童生徒の「思考・判断」に関する機能の特性や弱さとして、①シングルフォーカス（情報の一部分だけを見てしまう）②全体-部分の知覚の弱さ（情報を関連付けたり、要点を把握したりすることが苦手）などがあることを念頭に入れると良い。

・ワークシートでは、自分の学習活動の振り返りと学習の評価規準とを結び付けていくことが難しいという生徒達に対しても、それが分かりやすいように、学習活動に番号が示されていて、自分ができたこと、分かったことを想起しやすいように工夫されていた。

・カリキュラム・マネジメントについて、長大特支で既に明らかにしている「目指す児童生徒像及びその具体的な姿」、これを基に、先ほど紹介した生きる力の三つの要素や三つの柱のスクリーンを通して、改めて学校としての育成を目指す資質・能力を具体化、明確化していくことが必要ではないか。

松田先生

質問	①	発表者からの回答
話型は、どのような手順で決定されたのか？活用していく中で話型を追加していくこともあったのか？		・小学校で先行研究されていた報告を参考にして、話型を考えた。比較に焦点を当てたことに関連させて、友達の意見と比べたり、これまでの学習と比べたりする表現を引き出すことをイメージして話型を提示した。１年間の実践だったので、はじめに提示した話型から追加したものはない。
質問	②	発表者からの回答
なぜ「比較」を取り入れた学習指導に重点を置いたのか、その理由をもう少し聞きたい。		・今回実践した国語・数学は、習熟度別の四つのグループで行っており、四つのグループで共通に取り組める授業改善の視点を考えるときに、二つ以上の事柄を提示し、比べさせて類似点や相違点を探し出し、問題や特徴に気付かせるという「比較」は、習熟度に応じて取り入れやすいと考えたこと。 ・さらに、本校が、キャリア発達を促すことを教育目標に掲げ、これまで取り組んできた中で、学習の振り返りを大切にしてきたことと関連させて、学習の振り返りの中に「過去と比べて自分の変容に気付かせる」という視点も取り入れられると考えたこと。 以上、大きくはこの二つの理由から、「比較」に焦点を絞っていった。

第４分科会 【特別支援学校】（キャリア教育・進路学習）

「就業サービス科の進路指導～専門教科を中心とした職業教育～」

発表者：虹の原特別支援学校　教諭　平山　拓也

助言者：長崎県教育庁　特別支援教育課　係長　中尾　敏光

1　テーマ設定の理由

就業サービス科を設置して５年目となり、これまでの専門教科や進路指導の在り方を見つめ直し、課題点を整理していくとともに、これまでの成果と課題、今後の展望とを照らし合わせることで、専門教科のさらなる充実につながり、卒業後の企業就労に向けた進路指導の充実につながるのではないかと考え、今回のテーマを設定した。

2　就業サービス科について

（１）設立からこれまでの軌跡

①長崎県特別支援教育推進基本計画第３次実施計画　⇒　職業学科設置に向けた研究（平成２６年度から３年間）

②平成３０年　職業学科（就業サービス科）設置

（２）学科の理念

（３）キャリア教育全体目標

3　各教科等と専門教科を中心とした職業教育

（１）各教科

（２）生活総合（社会、保健、家庭、自立活動、特別活動）

（３）自立活動

（４）専門教科 「農業」「流通・サービス」 ※各専門教科の実践の詳細は資料をご覧ください。

4　デュアルシステム型現場実習の実際

（１）デュアルシステム型現場実習の定義

１週間に１日程度の実習を数週間続ける現場実習　⇒　長期的な成長・不安の軽減

（２）デュアルシステム型現場実習の取り組み

5　進路指導

（１）卒業後の進路実現に向けた考え方

（２）短期実習

6　成果と課題、今後の展望

（１）「職業」の授業の充実

【成果】・ライフキャリアを取り入れた授業改善

・生徒主体の実習報告会、意見交換会

【課題】・生活の場をイメージさせる学習（グループホームの見学）

（２）専門教科の整理

（３）デュアルシステム型現場実習の在り方

（４）農業の取り扱い

（５）就業サービス科の周知

（６）専門教科を中心とした進路指導

・今回の発表では身に付けさせたい力を左側にある４領域で分けられている。必ずしも「基礎的・汎用的能力」で整理をする必要があるというわけではないが、慣例を参考に、課題対応能力が少し弱いとか、もっと細く具体的にどんな力が必要かなどキャリア教育の手引きなどで確認していただき、学校全体のキャリア教育の目標を今一度点検し、もれているところがないか今一度確認していただきたい。

・デュアルシステム型現場実習には様々な取組方法があるが、指導について、評価は誰がするのか、実習に取り組む環境など、今後いろいろな視点で、より子供たちの学びにつながるよう、さらに良くなるように検討していってほしい。外に学習に出ていくということについては、社会に開かれた教育課程の視点においても、重要な取組になる。例えば外に出て実習をして実際の教師の指導の様子や取組を、地域や実習先の方にも見ていただいて、学校での指導の方法や関わり方などを見てもらうことで、外の方への理解を深めてほしい。開かれた教育課程という意味でもつながると考える。

中尾先生

質問	①	発表者からの回答
現在のコース以外で、考えられているコースはあるのか。		・現在は１学年（クラス）が８人であることに加えて、職員配置や学習環境、地域産業を考慮して、現在の２コース（販売・事務サービス、清掃サービス）を設定している。現段階では、別のコースの検討はしていない。
質問	②	発表者からの回答
実習の回数の多さや充実が普通科と違うことは理解できたが、進路指導として違いは何かあるか。		・進路指導の流れは普通科と大きな違いはないが、就業サービス科では、入学当初から卒業後の企業就労を意識できるように、学科集会等で話をしたり、各種授業等を通じての進路指導を行ったりするように心掛けている。

第５分科会 【特別支援学校】（自立活動）

「落ち着いて授業に参加できるようになるための自立活動の取組

～外部専門家の助言を生かした中学部生徒への指導～」

発表者：鶴南特別支援学校　教諭　田中　達也

教諭　濵田　美香

助言者：島原特別支援学校　校長　近藤　亮二

1　本校の自立活動について

本校は、長崎市南部の自然豊かな場所に位置する、知的障害のある児童生徒を対象とした特別支援学校で、小学部から高等部まで１56 名の児童生徒が在籍している。本校では、各部週時数は異なるが自立活動の時間における指導を設定している。

2　本校の外部専門家活用について

本校では、県の発達障害児等能力開発・教育推進事業（外部専門家活用）として長崎大学教育学部教授で臨床心理士である内野成美先生を招き、各学部１～２名ずつ、行動面、情緒面、心理面等に課題のある児童生徒について、児童生徒の授業や自立活動、学校生活の様子等を実際に参観してもらい、実態把握や指導目標、指導方法の改善や、心理面での配慮などについて助言をいただいている。

3　外部専門家の助言を生かして、指導を改善するための「パワーアップシート」

本校では外部専門家とのやりとりの流れに沿って、以下のパワーアップシートを記入、活用している。特に、③で助言を教育的な視点で再考し整理することや⑤でこれまでのやりとりを通して身に付いたり、高まったりしたと感じる視点や考え方、働き掛けについて記載することで、自立活動の指導における専門性の向上を図っている。

児童生徒名		担当者名		担当専門家名	

障害名及び疾病名	
自立活動の目標	

指導助言日	課題・専門家に助言してほしいこと	外部専門家からの助言	助言を得て整理したこと・修正した方法や手立て等	児童生徒の変容	教師の変容
1回目 月 日（ ）	① →	② →	③ →	④ →	⑤
2回目 月 日（ ）					
3回目 月 日（ ）					

4　外部専門家の助言を生かした中学部生徒への指導

※対象生徒の実態や指導の詳細については割愛いたします。

（１）成果

〔生徒の変容〕

①タブレットＰＣを使用することで、５０分の授業に落ち着いて参加できることが増えた。授業への参加を拒否することがほとんどなくなり、自分から教室へ入ることができたり、みんなの前で問題を答えたりすることもできた。

②要求や気持ちを伝える際にカードを指さして伝えることが増え、教師と一緒に要求や気持ちを確認することができた。 不適切な行為があったときは、教師と一緒に○×カードを使って自分の行為を確認したり、生徒自身が指を交差させ、「×」を示したりしながら確認することができた。

〔教師の変容〕

①気持ちを落ち着かせるためにタブレットＰＣを使用させることは、本人にとって悪影響なものであると感じていたが、タブレットＰＣを使用することで、分かることやできることが増えるという考え方をもつことで、一つのツールとして活用できるようになった。

②中学部段階という年齢に応じた指導だけでなく、本人の発達段階に応じた指導を考えて取り組むようになった。

③不適切な行為は受け流し、必要以上に対応しない。視覚的支援を活用し、気持ちを伝える手段を与えたり、丁寧にお願いしたりするなどの適切な行動を学習させたりしながら取り組むようになった。

（２）課題

〔支援について〕

①視覚的支援については、長期的に継続して活用し、定着を図る必要がある。

②精神の安定を図り、衝動性を抑えるために服薬しているが、副作用の影響で眠気、ふらつきが強くなり、活動に取り組めないことがあった。

〔連携について〕

①家庭だけでなく、施設や医療との関わりが大きい。こまめな情報交換や懇談等で支援や手立てについての共通理解を図りながら取り組んでいるが、学校、家庭、施設で同じような支援を行うことは難しい。

・今回の発表は、自立活動の指導であるので、小学部段階からの学びの履歴を把握しておき、問題行動の背景にある要因へアプローチをすることが必要である。学習指導要領解説にある実態把握から具体的な指導内容の設定の手続きに沿ったものが発表の中にあると、聞く側として、子供のイメージをもって聞きやすかったのではないかと思う。また、目標についての妥当性なども示されると、より、発表が充実したのではないかと考える。

・中学部、高等部においては、自己理解を深める指導が大切な視点である。自分にはどんな困難さがあり、そのときにどのように対応したらよいかを知っておくことは、学校卒業後の将来の生活に必要な力になる。

・知らないことに出会うときには、不安が生じる。不安が生じたときに頼れる大人の存在が大切である。

・学校では、教師が寄り添う立場。人間関係に課題のある児童生徒に担任一人ではなく、チームで関わることが大切である。

近藤先生

質問	①	発表者からの回答
小学部時代の指導の引継ぎなど、対象の生徒の過去の履歴の情報が欲しかった。変容として、授業に参加できるようになったが、他傷の頻度は変わらなかったと聞いて、どんな場面で他傷があったのか、その内容も知りたかった。	➡	【指導の引継ぎ】 ・様々な指導や支援について細かく引継ぎを行った。一日の流れを示した行程表などで見通しを示す方法などについては、中学部でも引き続き活用しながら取り組んでいる。 【他傷がある場面】 ・全ての授業に落ち着いて参加できるようになった訳ではなく、その日の体調や授業の内容、薬の調整具合などによって不安定になることはあり、そのような場面で他傷が見られることも多い。また、笑顔で過ごしているときでも突然表情が変わり、近くにいる友達や廊下などですれ違う友達に手を出そうとすることもまだある。

事務局より

本会の専用ホームページを開設いたしました。これにより、必要な情報等は全てホームページをとおして発信いたしますので、ぜひご活用ください。

長崎県特別支援教育研究会ホームページ URL　choutokuken.com